

連載(54) 地域密着を進める
女子大学の人づくり
 宮城学院女子大学 長谷部 弘
 学長

再度、プールボー女史の時代を取り上げ、開校初期における福音ミッションと女子教育の諸相を見てみましょう。プールボー女史の女子教育とその働きについては様々に評価されていますが、少なくとも、当初、彼女が生まれ育った当時の北米ペンシルバニア地方におけるドイツ改革派教会のキリスト教信仰と分か

ちがたく一体化した、「欧米風」の生活文化があったことは確かでしょう。宮城女学校が設立される1886年前後、日本各地で女学校が建設されつつありました。前年に初代文部大臣となった森有礼が日本の将来に果たす女性の役割を重視したことはよく知られています。1886年夏に来仙するやいなや、ゼロからの女学校建設に取り組んだ初代校長プールボー女史は、本国の教会に向け、校舎建設のための巨額の献金を求めます。そこで「近い将来に、この学校が大きくなるという見通しは明るく、今はまさにどのような学校にするべきかを考えています。知的教育に関する限りでは、日本人が今まで公立学校で行っていたものよりも、高度な教育を私たちに期待しているのは明らかです」と述べ、日本の女子高等教育機関に劣ることのない最善の高等教育を提供することが、福音宣教のためにも必要だ、と主張します。プールボー女史の考える女子教育とは、福音と高等教育によって自立した女性を育成することでしたが、その働きは「大草原の小さな家」における母親のような働きでし

た。しかし、当時の日本も工業化が開始されたばかりの農業社会です。都市・農村を問わず、大方の女性たちが、それまで歩み、それ以後歩まなければならなかった人生もまた、基本的に「家」的な家族の中の母親としてのそれでした。したがって、寄宿舎を作る際、「道徳や科学だけではなく、秩序正しい家庭を築くために女子に必要な家事知識をも教え」、家庭人としての女性になることを目指したこ

とは、それほど間違った認識や偏見ではなかったと言えます。校舎建設は、おりからの企業勃興ブームで建築資材や工賃の値上がりで激しく、難航しました。女子校教育の方は、予想通り、英語を用いた授業が人気で、仙台市内の役人や軍人、商売人の子女たちの関心を集めました。数人から始まったクラスは、あつという間に四十人を超える大所帯となりました。しかし、ことキ

福音宣教と英語・音楽



リスト教の宣教や教育については難航したようです。生徒たちが英語での聖書朗読や祈りができるようにすると、その親たちは、特に軍人や役人を中心に、娘を女学校に通わせるのをやめさせる、といった動きが生まれました。また、十三歳から始まる生徒たちの学業生活も、なかなか長続きしなかったようです。どうも、親たちも彼女たち生徒も、その関心は、女学校の提供するキリスト教的な人格・教養教

育や、自立した女性になることにはなく、西洋の学校で学んだということによって箔をつけ、良い結婚に繋げる、というところにあつたようです。ところで、プールボー女史は、仙台に来てすぐ、再三に渡って移動可能な小型オルガン「ペビー・オルガン」の送付を督促しています。最近研究会で教えてもらったのですが、その理由は、どうも当時の日本人の音階文化にあつたようです。日本人は5音の音階しか持たず、7音の音階を持つ讚美歌をオルガン等の楽器の助けなしには歌うことができなかつた。讚美歌を日本人と一緒に歌うために、移动式オルガンが必需品だったというわけですね。

宮城女学校の初期女史教育において目玉となった英語と音楽には、そんな背景がありました(続く)。



長谷部 弘(はせべ・ひろし) 1955年生まれ。福島市出身。東北大学経済学部、経済学研究科修了後、同学部助手、教養部講師、国際文化研究科助教授を経て、99年に経済学研究科教授。2021年定年退職し東北大学名誉教授。23年4月から宮城学院女子大学学長。専門は日本経済史。博士(経済学)。